

## 資 料

ルーヴル美術館のダヴィド<sup>1)</sup>のアトリエ

— 「パリ歴史散策」(7) —

ジョルジュ・カン 著  
金 柿 宏 典\* 訳注

国立美術館管理局長が、先日、カルナヴァレ美術館<sup>2)</sup>に対し、収蔵しているパリ市の歴史的蒐集品の中から、古い肘掛け椅子と使い古された鑄鉄製のストーヴを処分してよろしい、という通知をした... 急いでつけ加えなければならないが、この極めて興味ある品物は、偉大なる画家ルイ・ダヴィドがルーヴル美術館に持っていたアトリエからもたらされた物なのである。

という訳で、オモル氏の招待を喜んで快諾した私たちは、ある朝、ストーヴと肘掛け椅子のある管理官の部屋に通じる長い階段をあわたゞしく登って行ったのである。二つの品は典型的なもので、疑問の余地の無い本物だった。肘掛け椅子は、「高位の者の座る象牙椅子の形」[*forme chaise curule*] をしており、堅固な輪郭と革の背もたれを持ち、*Brutus* という画家の名が印してある。標章で飾られたストーヴは、マティユー・コシュロー<sup>3)</sup>が1814年のサロンに出品した「ダヴィドのアトリエの内部」*Intérieur de l'atelier de David* の画面に描かれているストーヴに間違いなかった。その画は現在「七つの暖炉」のホールの「ナポレオン一世の戴冠式」*Sacre de Napoléon I<sup>er</sup>* の下に懸っている。

コシュローのこの絵画は魅力的で、十九世紀美術史にとり非常に価値がある。アトリエは、闇に沈み、半開きになった二つの鎧窓からさしこむ一條の光と、カーテンで半ばかくされた大窓から入ってくる光だけによって照らされている。鎧窓のすき間から(1802年に建造された)ポン・デ・ザール<sup>4)</sup>の階段とルーヴル河岸<sup>5)</sup>が見える。その奥に

---

\* 福岡大学名誉教授

はガッリー・アポロンのある建物の角が姿を見せている。この事からアトリエがサン・ジェルマン・ロクセロワ広場と河岸の角にあった事がわかる。この場所に現在ではエジプト美術館に通じる大階段の支柱が並んでいる。巨匠ダヴィドは自分のアトリエを弟子たちのアトリエの真上にある所に持っていた。そこが「ホラティウスのアトリエ」*Atelier des Horaces* と呼ばれていたのは、このアトリエで有名な「ホラティウス兄弟」*les Horaces*<sup>6)</sup>が制作されたからである。[原注：共和暦第8年霜月29日(1799年12月10日)付の『自由人』紙*Journal des Hommes libres*に次の告示が掲載されている。：市民ダヴィドは市民諸氏に次の如くお知らせる。絵画「サビーヌ」*Sabines*<sup>7)</sup>の展示は、共和暦第8年霜月30日以降、午前10時から午後4時まで、バック街<sup>8)</sup>から入った右手階段の科学芸術国立宮殿の元の建築アカデミーのホールで開催される。説明パンフレット付きの入場料は前記のホール入口で配付され、1フラン80サンチームである。——オラルル<sup>9)</sup>。『執政政府時代のパリ』*Paris sous le Consulat*, t.1, p.61.]ダヴィドは学士院に向い合った河岸に第2のアトリエ「サビーヌのアトリエ」*l'atelier des Sabines*を持っていたのである。[原注：このアトリエでダヴィドは「サビーヌ」*les Sabines*を制作した。北東の角にあったこのアトリエで、ダヴィドは、ブルトゥス<sup>10)</sup> マラー<sup>11)</sup>、ルペルティエ・サン・ファルジョー<sup>12)</sup>、その他何枚かの肖像画を描いたが、特に第1執政の肖像を描いている。「掌球場の誓い」<sup>13)</sup> *Serment du Jeu de Paume*のため、彼はチュイルリ近くのフィヤン教会<sup>14)</sup>を使用していたが、リヴォリ街とラ・ベ街の開通のために移転しなければならなくなる。しかしその代償としてクリュニー教会を獲得、フィヤンで着手していた「皇帝の戴冠式」*Couronnement de l'Empereur*<sup>15)</sup>を仕上げた。彼はここでまた「軍旗の授与」*Distribution des Aigles*<sup>16)</sup>も完成させている。「レオニダス」*Léonidas*<sup>17)</sup>はここで開始されたが、サビーヌのアトリエで完成した。](図版A)

ダヴィドの多くの弟子たちは、現在は柱廊と北正面入口の角にある大階段の外壁の上部にあった数箇所のスペースに住んでいた。彼らの輝かしい師匠は、妻と4人の息子たちと共に、スデースから程遠からぬ今日ではオーギュスト・ホールと呼ばれている所の近くに住んでいた。

ダヴィドのアトリエに行くには、河岸と広場の角に面している、狭くて暗い螺旋階段を登らねばならなかった。現在では使用されていないこの階段はエジプト・ホールに出るが、そこには、ラムセス2世<sup>18)</sup>の墓からもたらされた七宝焼の青い素晴らしい古代エジプトのカノーボス<sup>19)</sup>の壺が千箇展示してある。アトリエは皇太子の庭の上に張り出して

いた。弟子たちのアトリエは修道院の大きな個室のように何も無く、壁のあちこちに裏返しにされた絵が立て掛けられており、画架や絵具壺が散乱している。コシュローの興味ある画は12人ほどの青年を描いているが—— シュネツ<sup>20</sup>とパニエスト<sup>21</sup>もいる—— 彼らはデッサンをしたり、あの有名なストーヴの近くでポーズをしているヌードのモデルを描いている。1825年、この魅力的で資料としても価値のある画を3,600フランで購入するというグッド・アイデアを持ったルイ18世<sup>22</sup>をしばし偲んでみよう。この時期、ダヴィドは、ルイ16世処刑に賛成投票をして弑逆者となった国民公会議員を追放する法律により、ブリュッセルで死亡していたのである！[原注：彼は1825年12月29日に死去した。1816年以来、人々は何度もダヴィドをフランスに帰国させようと努力していた。シャルル10世がサント・ジュヌヴィエーヴの大聖堂を訪問した時、ダヴィドの弟子で師匠の帰国に最大の関心を抱いていたグロ<sup>23</sup>が、自分の作品の出来栄に勇気づけられ、国王に自分の師匠の帰国を要請した。しかし国王はレカミエ夫人<sup>24</sup>にした様に、ダヴィドの帰国を拒否したのである。

ダヴィドの死に際し、グロと弟子たちが上院に行こうとしたのは、そこに「サビーヌ」と「レオニダス」が飾ってあるので、それに花輪と喪章をつけようとしたのである。リュクサンブール宮の傑作の絵画はルーヴル宮に移転する時に何時もそうされていたからである。リュクサンブール宮の扉は画家たちに閉じられていた。ダヴィドの絵画をルーヴル美術館の大ギャラリーに展示する事は宮廷が禁止した、と人々は確信したのである。—— ドレクリューズ<sup>25</sup>の未刊の『回想録』。Nouvelle Revue Rétrospective, t.x.p.172.] (図版B)

さてここでストーヴが確認された。このストーヴはアトリエを暖めていたのである。肘掛け椅子は、おそらく巨匠のアトリエを飾っていたのであろう。ダヴィドの弟子であるE.-J. ドレクリューズの『回想録』*Souvenirs*の一節は、私たちに十分に次の事実を教えてくれる。「よく使用されている二つの大きな安楽椅子の代りに、片方にブロンズ製の高官用椅子があり、二つのXの両端は上下共に動物の頭と足で飾られ、もう一方は金色のブロンズで飾られた大きなマホガニー製の背もたれのついた大きな椅子があった... 日常使用している椅子は黒いマホガニー製で、赤い木綿のクッションで覆われており、当時最も秀れた指物師ヤコブ<sup>26</sup>の手になるエトルリア風の壺をコピーしていた。」[原注：極めて貴重な『回想録』を残してくれたE.-J. ドレクリューズは、ダヴィドが愛していた弟子の一人であった。彼の芸術的愛好度がこの著書を精読すると判明す

るだろう。彼は余暇の一部を英語の原文で『オシアン』*Ossian*<sup>27)</sup>を再読していたのである！]私たちの肱掛け椅子は、この部屋の中で可成り厳然として自分の場所を占めている！ 長椅子も無く、ラシャのカーテンも無く、花も無い... ダヴィドがオラース家の人々やブルータスあるいは彼の友人であるロベスピエール、ル・ベルティエやマラの面影を喚起している時、この肱掛け椅子は彼らに友情の腕をさしだしたにちがいない。このアトリエのほの暗い隅に、古代風のベット —— この上に坐るレカミエ夫人を巨匠はなんと見事に描いていることか —— は物を置く場所に利用されている。このベッドの上に、使えなくなったフレーム、破れた古い習作、バラバラになったマネキンなどが積み上げられていた... すべてがまさしく冗談そのものだ！ リュクルゴス<sup>28)</sup>的な室内で、人々は真剣な事柄を話し合っていたのだ！

前世紀の初頭の年月が、ダヴィドの推進力によってすさまじいまでに「古代ギリシャ・ローマ化」されたかはよく知られている。国民公会の祭典の公式の幹事の恐るべき監督は、到る所で再発見できるのである。

女性たちは、古代ギリシャ・ローマの軍人たちのような短いマントを再び着用したり、ペプラム（古代ギリシャの女性用外衣で、長方形の布を肩でとめる）をまとったりした。「立法者」「軍神マルスの学校の生徒たち」「瞑想家」たちが、「ほとんど常に曲折模様」の刺繍を施したラコニア（スパルタを首都とするギリシャの州）風の寛衣を着たり、ローマ風の衣裳を着たりして徘徊していた。「カドネット」(18世紀の歩兵の両側に垂らした長い編毛)や「ルトルッシ」(長髪を上には掻き上げる巻毛)はなくなり、「ティトウス皇帝風」(前後とも短く刈るヘアカット)の髪が流行した。

屋根裏部屋には、丸くふくらんだクッション付きの座席を持った傷んだ家具、寄木細工の花模様のある「婦人用の化粧机」、セーヴル焼き<sup>29)</sup>の盆、みだらな絵の敷物、旧制度時代の「好色な」小像などがあった。美德が「今日の問題であった」時代、ワトー<sup>30)</sup>、パーテル<sup>31)</sup>、ランクレ<sup>32)</sup>、プーシェらは危険視され非国民的と指弾され、河岸沿いで二束三文で売られていた。さらに老フラゴナール<sup>33)</sup>は、余りに多くの蓮っ葉な女神やバラ色の喉を持つ若い女性や、いたずら好きな瞳を輝かせ、はじらいの門をはずし、花の中でブランコに乗ったり、あるいは愛の神の足元にひれ伏したりしている快活な美女を描いた事を恥じて、自分自身が追放され、無視され、脅迫されている、と感じたのである！

彼は自分の魅惑的芸術が「鉄と血」の世代に最早合っていない事を理解した。彼は「愛国心の証明書」を懇請し、「善良なる母」*la Bonne Mère*を祖国に捧げ、共和暦第2

年風月 24 日、ルーヴル宮の中庭で自由の木<sup>34)</sup>の植樹祭に出席し、二枚の陰うつな寓意的絵画「和平か開戦を決定するため集合した上院」*le Senat assemblé pour décider la paix ou la guerre* と「ヤヌス<sup>35)</sup>の神殿の閉鎖」*la Fermeture du temple de Janus* を描く事に専心した。

ウドン<sup>36)</sup>が彼を模倣した。彼は自作の甘美な「聖なる学問の女神」*Sainte Scholastique* を厳粛な「哲学」*Philosophie* に変貌させてしまった！ しかし徒弟修業は「ブランコ」*l'Escarpolette* の前述の素人画家たちにとり辛いものであった。彼らは、マラ、クートン<sup>37)</sup>、サン・ジュスト<sup>38)</sup>、シャリエール<sup>39)</sup>の映像を凝視するように強制され、「平等によりかかる自由」*Liberté s'appuyant sur l'Egalité* や「聾啞者のデザンヌにより死後七日目に掘り出され型にとられたダントン夫人の胸像」を前にして呆然自失しなければならなかった！

1793 年以來のなんという深淵か！... それに昔の小粒の画家の見捨てられた芸術がなんと残念なことか！ しかし厳格な改革者ダヴィドを前にしたこれらの「悪童連」を語ることは良くない。改悔しない弑逆者は、ホラティウスの彼のアトリエから、簡単直截に「死」*la mort* を彼らに対して命じたのである！[原注：私たちは次のようなダヴィドの自筆の手紙を持っている。

「ダヴィド、画家、は善良にして誠実なるプイオーザ<sup>40)</sup>に挨拶を送る。この旬日の 6 日か 7 日にルーヴル宮 8 号の小生宅にて夕食を共にする事をお願いする所存である、もしよろしければ...

友情をこめて

ダヴィド」

(G. カンの蒐集より)]

\*  
\* \*

アンリ 4 世により開設され、ナポレオン 1 世により閉鎖されたルーヴル宮のアトリエの英雄的な歴史を語るためには、一卷の書物が必要になるだろう。1608 年 12 月 22 日付のペアルン人（アンリ 4 世）の免許状は次の如く規定している。「大回廊の階下であり住居となりうる所はすべて最も有名な芸術家や職人たちに与えられる。彼らはそこに居住して自由に自分の芸術を創作し、パリの親方組合やその他のものに顧慮することな

く徒弟を養成してよろしい」。という訳で、最初の住人は画家、彫刻家、金銀細工師たちや、宮殿の建設に従事していた者たちであった... かくて芸術家の侵入は19世紀初頭まで続くことになる。[原注：総裁政府時代、「投機売買」の最盛期に、政府は証券取引所のため、王妃の館のホールの一つを提供した... (ジュルナル・ド・フランス紙、共和暦第3年草月1日)]。

ルーヴル宮は「才能と芸術の集合所」になった。有名なほとんどすべての芸術家は居住者のリストに記載されており、彼らは二百年にわたってこの宮殿に住むことになる。最初の頃に保たれていた慎み深さは長続きせず、濫用が日常茶飯事となる... アトリエの隅に臨時に設置された簡易ベットを初めは慎ましく囲っていた片付ける事のできる衝立はすぐに頑丈な仕切壁になり、その部屋に家族全員が住み込むようになった。かくして、ルーヴル宮には、芸術家の26軒の住居が誕生したのである... なんと騒々しい集合所か！ 人々は住居の事で口論し、陰謀を企て、密謀をこらし、つまらぬ事で言い争った。男たちよりもっと烈しく、女たちは廊下や階段で喧嘩をした... 口論、悪口、陰口、嫉妬など御想像の程を！ (図版C)

じりじりしながら待たれている「ルーヴル宮の住民」の死は嵐を巻き起す。カフィエリ<sup>41)</sup>がシモン・シャルの後に入り、ロスリン<sup>42)</sup>がトケ<sup>43)</sup>の後に、ユベール・ロベール<sup>44)</sup>が彫刻家ルモワヌ<sup>45)</sup>の後にいった時、同じような陰謀が連続したのである... 次にくるのは、隣人たちとの絶えることのない厄介事であり、お役所への長い請願書である。1774年、カフィエリはアンジヴィリエール伯爵<sup>46)</sup>に要請書を次々と提出した。「階段をまたぐため、アトリエ近くに建築させた小部屋が取り上げられたので、4,000リーヴル以上の損害を被りました...」彼は抗議し、「デポルト<sup>47)</sup>の死去により空いた回廊の部屋」を要求し、最終的に「アレグラン氏<sup>48)</sup>が辞職したために空いた部屋」を獲得した。[原注：カフィエリの手紙：「閣下、デポルト氏の死去により空いたルーヴル宮の回廊にある住居を貸与して下さる事を伏してお願い申し上げます。(この部屋は既にフェサル<sup>49)</sup>、バスキエ、ブリアール<sup>50)</sup>によって要請されていた)。

(1774年6月2日)

1773年2月13日 —— 6週間後、国王からの年金とルーヴル宮の回廊の住居を享受していた彫刻家ル・モワヌの死が、カフィエリに新しい請願の機会を与えた。しかしこの部屋を入手したのは画家のユベール・ロベールだった。

1781年12月23日に死亡した版画家ドルヴェ<sup>51)</sup>の部屋は、J.-N. タルディュー、ウィ

ル<sup>52)</sup>、J.-P. ル・バ<sup>53)</sup>及びサン・ルイの司祭の推薦する版画家ドーデ<sup>54)</sup>らが要請していたが、ポンシャルトラン<sup>55)</sup>侯爵夫人に貸与された。(J. ギフレ, *les Caffieri*, pp.267, 268.)] なんととも雑多な集合だった！ 画家が大部分だった。モワト<sup>56)</sup>、ラグルネ<sup>57)</sup>、ヴィアン<sup>58)</sup>、ヴァンロー<sup>59)</sup>、C. ヴェルネ<sup>60)</sup>、トケ、ヴァレイエ・コストル夫人、モロー・ル・ジュンヌ<sup>61)</sup>、ゲルーズ<sup>62)</sup>と彼の娘達、ルニョール<sup>63)</sup>、ダヴィドと彼の妻と4人の子供（彼らは現在のオーギュスト・ホール近く、シャルル9世の金色のバルコニーの右手の一階に住んでいた）、フラゴナール、彼の妻と美しい義妹ジラール嬢、ムーシ<sup>64)</sup>、バジュー<sup>65)</sup>、クロディオ<sup>66)</sup>ら彫刻家たち、建築家のヴォドワイエ<sup>67)</sup>、版画家のドビュクール<sup>68)</sup>、元司祭で数学者のポシュ<sup>69)</sup>、地理学者のマンテル〔原注：エドム・マンテルはアルトワ伯<sup>70)</sup>の修史官で、1792年にロラン<sup>71)</sup>がルーヴル宮の自分の部屋を彼に与えるまで、セーヌ街のマイエヌ館<sup>72)</sup>に住んでいた。〕

彼の家は「才能と芸術の集会所」だった。彼の家では素敵な音楽が演奏された。ここでブリソー<sup>73)</sup>がフェリシテ・デュボン嬢と出会い、やがて結婚する事になる。マンテルはフランス皇太子の勉強のため直径3ピエ（約97.5センチ）の地球儀を製造させた。その地球儀は、1877年から国立図書館のホールの一つに展示してある。

ルーヴル宮における彼の部屋は、大回廊の中に設置されている26室の一つであった。マンテル一家（彼と妻）は11号室で、両隣は画家ユベール・ロベールと金銀細工師メニエールで、8号室にいるロランの友人のピエール・パスキエとは目と鼻の先の所だった。

彼のアドレスは以下の通り。

マンテル、学士院会員、オルティ街<sup>74)</sup>、ルーヴル宮19号。

これは大回廊に入るドアのアドレスと同じで、この部屋にマンテルは1806年まで住んだ。その年に皇帝が回廊から芸術家たちを退去させたのである。——「ロラン夫人<sup>75)</sup>の手紙」*Lettres de M<sup>me</sup> Roland*, Cl.Perroud 版。] 刀剣研ぎ師のグノーなど多士済済であった。〔原注：グノーは、『ファウスト』*Faust*, 『ロメオ』*Roméo*, 『ミレイユ』*Mireille*などの作者で偉大なる音楽家シャルル・グノー<sup>76)</sup>の父であろう。〕

大革命もこれらの律義な人たちがルーヴル宮に住んでいる事を認めた。彼らは「どっしりと腰を据えて気楽に暮していた」のである。住居はそれ程広くはなかった。「河岸に面した窓の一つからだけ光を採り入れたが、その代り奥行きが可成り広がったのは、建物全体の長さをお占めていたからである。住居は地下室、一階、及び中二階の高さに合

せて造成された可成り低い三階の部屋を含んでいた。」1789年10月5日から6日にかけて起った民衆のヴェルサイユ宮乱入<sup>77)</sup>により、国王はパリに住むことを強制され、親衛隊の士官たちの住居を供給しなければならなくなった。宮廷を受け入れる準備は何もなされていなかったの、かくも多くの新参者の部屋を用意するため、テュイルリ宮<sup>78)</sup>とルーヴル宮から、そこに住んでいた多くの住民たち —— 住む権利の有無を問わず —— を退去させねばならなくなった。怒号と憤怒の叫びと恐怖の情景が展開する。しかし迅速かつ精力的に行動しなければならなかったの、建築家ミクは数時間のうちに宮殿の大部分を空にしてしまった。

芸術家たちの間には大きな動揺が生じた... しかしながら、次のような条件で彼らは退去を免れたのである。「王室の士官が仮住いするため、各人が一室か二室を提供すべし」。かくしてカフィエリは大好きな自分の住居に「国王付き常任食卓官」*controleur ordinaire de la bouche du Roi*のシャトラン氏なる人物を受け入れなければならなかった。〔原注：1号から26号の各室は、回廊の長さと同じ長さで、河岸に面している窓から光が入る一本の廊下に沿っている。フラゴナールは2号室、ルニョールは6号室、J.-B. イザベイは7号室、ユベール・ロベールは10号室、ユ<sup>79)</sup>は21号室である。

L.-O. メルソン：「美術誌」*Gazette des Beaux-Arts*, 1881年11月。

1790年。サン・ジェルマン門<sup>80)</sup>の下の芸術家の階段、左側。

一階：画家で「フランス児童」の習字の先生のブルネ氏のアトリエと住所。

以下各氏のアトリエと住居：画家のダヴィド、フラゴナール、マシー<sup>81)</sup>、ヴェルネ・フィス<sup>82)</sup>；皇后付き侍従クレワソー；画家のコレ、モネ、ラグレネ・レーネ；皇后付き専任小姓ラグルネ —— (「フランス美術文書 *Archive de l'Art française*, 第2巻, 147頁。)]

これは最初の警告だった... ルーヴル宮の王朝により認可された居住者たちがやっと元の生活に戻った矢先、芸術コミューンの革命軍が宮殿の住居に侵入し、今度は彼らがそこに住みついてしまい、先住者たちを脅迫したのだが、彼らは敢えて抵抗はしなかったのである...〔原注：1792年8月12日から13日以降、芸術家及び官吏に発せられたルーヴル宮の住居からの退去命令。

ルーヴル宮に居住し、そこから退去するべき人々に発せられた命令は、学者、作家及び美術家を除外する。彼らはこの資格で住居を取得しているからである。1792年8月16日。 —— (法律公報, 1789年から1814年F.M. ルーヴル。) —— 1792年8月



16日の国民議会の議事録。

「... ルーヴル宮に住居を持っている芸術家たちは、悪行により有罪となり、学問の聖域を汚した悪人たちの理由から自分たちの理由を区別して、この名誉ある住居を保有する事を許可してくれた立法院に感謝をしに来た。彼らはその会議に出席の榮譽を与えられた...」アカデミーは最早存在せず、全能のダヴィドは国民公會議員に選出され、弟子たちを教育する自分の技術は「モデル校」に達しているという忠告を、ルヌールに対して無愛想に答えている。[原注：ダヴィドは、1792年10月17日、パリ選挙集会により国民公會議員に選出された。彼は「叛逆者ロベスピエールの友にして共犯者」として、共和暦第2年熱月14日（1794年8月1日）に「逮捕」されたのである。]

—— 私は昔はアカデミー会員だった！...

このような住民により、ルーヴル宮は一種の集合住宅となり、管理もまずく、汚れてしまう。そして宮殿は不潔になり、面目を失い、家族の洗濯物がひるがえり、吐き気を催すような台所の臭いが漂い、子供たちが遊びまわり、文字通り腐敗した場所になってしまった。そこを支配していた悪臭の一つの詳細が明確にしてくれる。「柱廊にもたれている黒い大きな壁の近くに、巨大な排水管が何時も開け放しの便所の役割をしており、そこから消す事が困難な悪臭が立ち昇っていた」。

かかる状態は1806年まで続いた。ここを大掃除して世界で最も美しい美術館を設立するためには、ナポレオンの公式命令こそが必要だったのである！

ある夕べ、ナポレオンはオルティ街からカルーゼル門内のルーヴル宮に沿った汚い小路を通りかかった。彼は些細な事で喧嘩している蛆のように集まっている群衆を見たのである... 「何事かね？」と、彼は同行していたデュロック元帥<sup>83</sup>に尋ねた。デュロックは彼に事の詳細を話したのである...

—— これらの者どもすべてを退去させよう！ 彼らは私の美術館を、私の征服を燃やしてしまうにちがいない！

二週間後（1806年5月18日）、すべての者どもは忽ち退去させられたのである...  
なんたる教訓！

ルーヴル美術館のダヴィッド<sup>1)</sup>のアトリエ

「パリ歴史散策」(7)

訳 注

1) Jacques Louis David (1748-1825) : フランスの画家で新古典派の指導者。プーシェらに学び、1774年ローマ賞を獲得、イタリアに留学、「ベリサリウス」*Belisarius* などの傑作により新古典派を形成し、アングルやグロをはじめ多くの俊秀を養成し、フランス画壇に大きな影響力を持った。大革命に共鳴、1792年に国民公会議員となり、ルイ16世の処刑に賛成票を投じたため、王政復古の時に国外追放となって、ベルギーのブリュセルで客死した(1825.12.29.)。彼の描く歴史的社会的題材は写實的迫真力を持ち、「マラーの死」*La Mort de Marat* はその代表作。彼はナポレオンに愛され、「サン・ベルナル峠のナポレオン」*Bonaparte au mont Saint-Bernard* や、「戴冠式」*Couronnement de l'empereur* を描いた。

2) Musée Carnavalet : パリ第3区セヴィニエ街23番地にある。この建物は、1545年にパリ高等法院長ジャック・ド・リニエリより建造された、建築業者はニコラ・デュピュイ、装飾はジャン・グージュンがあたった。この建物はサンス館(1474年建造)、クリュニー館(1485年建造)とならぶ、パリの記念建造物である。1572年頃、アンリ2世の楯持ちで、後のアンリ3世になるアンジュー公の家庭教師を務めたブルターニュ出身の貴族ケルヌヴノワ Kernevenoy の未亡人フランソワーズ・ド・ラ・ポヌがこの館を買取った。それ以後、この新所有者の名がなまって「カルナヴァレ」となったといわれる。その後、この屋敷は相続や転買などで幾多の変遷を辿るが、通りの名前にもなった女流作家のセヴィニエ夫人が、1677年にこの家を借りて19年間を過した事が有名である。彼女はこの地区の美しさ、美しい中庭や庭園、美しい空気が気に入った。1626年にすぐ近くのロワイヤル(現在のヴォージュ)広場で生れた彼女は、この辺りの土地に親近感があったのである。1814年から1829年にかけては土木工学校も設置されていた。1866年7月、当時の所有者がこの館を900,050フランでパリ市に売却した。1867年にパリ市はこの館を歴史博物館としたが永続きせず、1871年に本格的に再建し、多くの貴重な資料の寄贈も受け内容が充実、1898年6月23日、フェリックス・フォール大統領臨席の下に開所式が挙行された。この本の著者ジョルジュ・カンが館長に就任した。絵画、彫刻、家具類などみるべきものは多いが、特に大革命時代の遺品が貴重であ

る。私事にわたって恐縮だが、訳者もこの館の一隅に展示してあったマリ・アントワネットの遺髪と称するものを見て感銘を受けた事は忘れ得ない思い出である。

3) Mathieu Cochereau (?) : ウール・エ・ロワール県の中都市シャトーダン近郊のモンティニー生れの画家。1807年にパリに上京、ダヴィドに学んだ後、パノラマの発明者である伯父プレヴォの助手となり、パノラマ用の大画面の何枚かを描いた。ルーヴル美術館は、27歳で死んだこの画家の作品「ダヴィドのアトリエの内部」を所有しているが、この作品は注目すべき価値のあるもの。

4) pont des Arts : ナポレオンの発案によって建設された橋の一つで、歩行者専用で最初の鉄橋である。左岸の学士院と右岸のルーヴル美術館（当時は芸術宮 palais des Arts と呼ばれていた）を結ぶもので、1802年から1804年までの工事、建設費が78萬フラン余かかったので、1848年まで一人1スーの通行料がとられた。散策者のため、鉢植えの樹木、椅子や長椅子を置いた歩道もつくられた。何度か改造されているが、コンティ河岸の護岸工事のため、アーチが一つけずられた（1852）。長さ155米、幅10米である。

5) quai du Louvre : 第1区にあり、ボン・ヌフとラ・モネ街からカルーゼル橋とテュイルリ河岸に至る、長さ660米、幅21.8米から32.8米の河岸で、1868年にこの間の三つの河岸を統合して出来上った。この橋のたもとはかつてフィリップ・オーギュストの城壁のセヌ川への終点で、巨大な円塔「隅櫓」tour du Coin がそびえていた。この河岸の10番地にあったカフェ Café du Parnasse の経営者カルパンティエの娘と結婚したダントンは彼女の持参金で弁護士株の株を買ひ、政界進出の足掛りにした事は有名である。

6) 正確な題名は「ホラティウス兄弟の誓」*Le Serment des Horace*。1784年、ダヴィドがローマ滞在中に制作された。依頼主はルイ16世。制作に11か月を要し、1785年のサロンに出品され、大きな反響を呼んだ。この作品は6,000フランで買上げられたが、アカデミー会員の注文作品としては通常の値段である。

ホラティウス三兄弟は紀元前7世紀のローマ皇帝テュリウス・オステリウス時代の人物で、半ば伝説上の人物とされている。当時ローマは南東に位置するアルバ・ロンガと覇権を争っていたが決着がつかず、代表選手三名を出して、その決闘の結果に従う事になった。ローマの代表はホラティウス三兄弟、アルバからはクリアス三兄弟が選出された。戦いが始まり、クリアス三兄弟はそれぞれ手傷を負うが、ホラティウス三兄弟は

二人が戦死、ホラティウス一人が生き残る。彼は逃亡するとみせかけ、追いつがるクリアス三兄弟を順々に殺害した。彼らは負傷の度合いで三人一緒に追跡できず、バラバラにホラティウスの跡を追ったからである。敵の武器を分捕ってローマに凱旋した彼は市民から大歓迎を受けるが、妹カミーユから烈しく非難される。というのも彼女の恋人がクリアス兄弟の一人だったからである。余りの非難に怒ったホラティウスは自分の愛国の行為を侮辱されたと感じ妹を殺してしまう。死刑の判決を受けたホラティウスだが、ローマ市民の熱烈な助命嘆願により助命される。しかし父は一種の槍門（三本の槍を組み合せ、その下を屈従の印として捕虜をくぐらせる）をつくり、ホラティウスを贖罪の印としてくぐらせた、と伝えられる。人々はこれを「妹の柱」poteau de la soeurと呼んだ。コルネイユも彼らをとりあげた5幕韻文悲劇（1639年初演）があり、彼はローベ・デ・ヴェガの3幕韻文悲劇を参考にしている。ヴェガの題名は『栄光の兄弟』*El hermano honorado* という。

7) *Les Sabines* : 「サビーヌの女たち」と名付けられたこの絵は、ローマと戦ったサバン人とその女性たちを描いている。サバンとはイタリア中部の住民たちで、彼らはやがてローマと和解して統合、サバン人出身の国王もローマを支配するようになる。ダヴィドの画は、この統合前のローマとサバンの戦闘場面を描き、ローマ初代国王ロムルスとサバンの將軍タティウスの決戦の間にはロムルスの妻エルシリが髪をふり乱して間に入り、殺戮を止めようとしている緊迫した情景を前面に描いている。この作品は5年間ルーヴルに展示され、65,627 フランの収入をダヴィドにもたらし、彼はこの作品と「レオニダス」を100,000 フランで売却したという（1819）。

8) *rue de Bac* : 第7区にあり、アナトール・フランス河岸のロワイヤル橋からセーヴル街に至る長さ1.150米、幅18米から20米の道。1550年にセーヌ川の渡し舟「バック」の発着場がつけられたが、1564年以来、テュイルリ宮建設用の石材を運ぶために大いに利用されるようになった。またセーヌ川までヴォージラルの石切場から石材を円滑に移送するため、野原の中に、現在のノートル・ダム・デ・シャン街、サン・プラシド街、デュパン街、バック街とつながる一連の道路が建設されたのである。セーヌ川に達する道路部分が「渡し場大道」*grand chemin de Bac* と呼ばれ、今日のバック街になった。本格的な改修は1662年から開始されるが、この年はアンリ4世の最初の妃マルグリット・ド・ヴァロワ（1563-1615）の旧邸跡地の分譲が開始された年である。彼女の宮殿の庭園はバック街まで広がっていたのである。この分譲以後、多くの豪邸が時

代と共に建築され、多くの有名人がこの通りに住んだ。シャトーブリアンは118番地のクレルモン・トネール館で歿している（1848.7.4.）。スタール夫人は102番地の邸でサロンを開き、悲劇女優マリ・ドルヴァルは110番地に住んだ。

9) François Alphonse Aulard (1849-1928) : シャラント県モンブロン出身の歴史家。ソルボンヌの教授を務めるかたわら（1886-1922）、テーヌの主張に反論、大革命を民主主義点観点から研究した。『ジャコバンの社会』*La Société des Jacobins* (1889-97)。『フランス大革命の研究と講義』*Études et leçons sur la Révolution française* (1893-1924)、『フランス大革命の政治史』*Histoire politique de la Révolution française* (1910) などの著作がある。

10) ローマの政治家 Marcus Junius Brutus (前85-42) であろう。シーザー暗殺の首謀者で、後にカシウスと共にオクタヴィアヌスとアントニウスの連合軍とフィリッピに会戦し、敗北して自殺した。大革命時代、独裁者たらんとしたシーザーを倒し、共和政を擁護した人物として、彼は人気があった。

11) Jean Paul Marat (1743-1793) : スイス西部ヌーシャテル郡のヌーシャテル湖西岸のほゞ中央にあるブードリの出身。ダントン、ロベスピエールとならぶフランス大革命の三巨頭の一人。『人民の友』*L'Ami du Peuple* 紙や『フランス共和国新聞』*Journal de la République française* に論陣を張り、王政打倒、人民主権の共和政の樹立に向けキャンペーンを行った。穏健派のジロンド派を議会から排除し、彼らを処刑台に送る事に成功、共和派の勝利を手中にした。しかしジロンド派のシンパであるマリア・アンス・シャルロット・コルディ・ダルモン (1768-1793) により、温浴中に刺殺された (1793.7.13.)。彼女はその場で逮捕され、4日後の7月17日に処刑された。

マラーは革命の殉教者として壮麗な葬儀が挙行され、彼の最後（「浴槽で暗殺されたマラー」*Marat assassiné dans sa baignoire*）を描いたダヴィドの提案により、遺体はパンテオンに安置されたが（1794）、テルミドールの反動政府により取り除かれてしまった（1795.1.）。彼の死は、反革命派に対するより厳しい態度を政権を握ったモンタニャール派にとらしめ、恐怖政治の弾圧を加速させた。

12) Louis Michel Le Peletier de Saint-Fargeau (1760-1793) : フランスの政治家。大革命前のパリの弁護士会長、パリ高等法院長。彼は三部会の貴族部会の議員として選出されたが（1789）、突如として革命派に転身、ルイ16世の死刑に国民公会議員として賛成票を投じた。しかし国王処刑の前日（1793.1.20.）、バレ・ロワイヤルのレストラン

で国王の処刑に反対する旧親衛隊員のパリスにより暗殺された。彼の遺骸は盛大な葬列と共にパンテオンに運ばれた。彼も旧体制の犠牲者として、当時は多くのパリ市民から哀悼された。

13) Serment de Jeu de Paume : 1789年6月20日に誓約された。大革命の初期、ヴェルサイユ宮で開催された三部会で、第三身分の議員たちが、ムニュ・プレジールのホールで国民議会の成立宣言を発表した(1789.6.17.)。王政の危機を宮廷の保守派から警告されたルイ16世は6月23日に宮廷行事挙行のための準備をするから、という口実でムニュ・プレジール・ホールを閉鎖し使用を禁じた。そのためドーフィネ選出のムーニエ議員の提案により、近接した掌球場に会場を移し、バイイ議員を議長として、国民議会の設立と憲法制定まで団結する事を誓った。この時からフランス大革命が開始されたといわれる。この歴史的情景をダヴィドは大画面に描いている。困みに掌球とはテニスの前身で、手袋をはめた手で球を打ちかえす遊戯で、大革命前後に流行、各地にその施設がつくられ、営業していた。

14) Les Feuillants : シトー修道会から分離独立した教団。Jean de La Barrière (1544-1600)により、トゥールーズ近郊のフィヤン修道院で1577年に創設された。会則が厳しい事で有名で、会員は白衣と白いフードを着用する。1587年、アンリ3世によりパリに招かれた。大革命時代の弾圧により弱体化し、1791年に解散し、ナポレオン時代には完全に消滅した。

余談だが、ヴィクトール・ユゴーが幼年時代の一時期をすごしたフィヤンチヌ修道院の建物は、1588年にトゥールーズ近郊のモンテスキューで結成された別派で、パリには1622年にアンヌ・ドートリッシュによりフォーブール・サン・ジャックに創設された僧院に本拠をおいたが、こども大革命により国有化され、修道会は解消せざるを得なかった。

15) *Le Couronnement de Napoléon* : ダヴィドの最高傑作。ナポレオンは自分で帝位の冠をかぶり、ローマ教皇や將軍たちが並ぶ前に膝まづいている皇后ジョゼフィーヌに冠をかぶせようとしている情景を描いている。ダヴィドは弟子のルージェ Rouget らの協力を得て、この絵の完成に4年の歳月をついやした。この絵の完成を知らされたナポレオンは皇后ジョゼフィーヌや多くの宮廷人と共に、彼がアトリエとしての使用を許可したソルボンヌ近くのクルニー教会を訪問した。ナポレオンは30分余りこの大画面の細部まで凝視し、そして見事な出来映えだと絶賛、脱帽してダヴィドに軽くお辞儀をし

た。皇帝のこの敬意に画家は、自分のみならず、すべての芸術家に対するものだと謝辞をのべたという。この作品は、1808年のサロンに出品されたが、この画をみた口さがないパリっ兒たちは、ダヴィドはジョゼフィーヌを実物よりも美しく若く描いたと噂した。

16) *La Distribution des Aigles* : 別題を「シャン-ド-マルスで軍旗の授与の後に皇帝になされた軍団の誓」*Le Serment de l'armée fait à l'empereur après la distribution des aigles au Champs-de-Mars* という。シャン-ド-マルスに壮麗なテントをたて、その中央に立ったナポレオンは部下の元帥や將軍を従え、大軍団に鷲の紋章をつけた軍旗を授与している情景が描かれている。皇帝と人民を守り、勇気を持って勝利の道を進軍する時、常にこの軍旗を捧持する事を誓うや？との皇帝の間に、出席した軍人全員が皇帝に誓うと答える場面である。この作品は、1810年のサロンに出品されたが、前記の「戴冠式」に比較すると出来映えは悪く、ダヴィドの作品の中では二級品として評価されている。

17) *Léonidas aux Thermopyles* : 1814年にルーヴル美術館に展示されたダヴィドの絵画。ペルシャ王クセルクセスの大軍が接近してくる時、ヘラクレスの祭壇近くの石に武器を手にして坐るレオニダスを中心に描いている。彼の右側にレオニダスの妻の弟アジスが犠祭の間花の冠を捧げ、祭儀が終るとその冠を兜につけようとしている。二名のスパルタの青年が木の枝にさげていた自分たちの武器を手にとっている。一人の兵士が岩に刻んでいる。「異国の人よ、ラケデモンの人々に告げ給え、我らは命令により此処で死ぬことを」。ダヴィドはバルテルミー神父の『ギリシャのアナカリス旅行記』*Voyage d'Anacharis en Grèce* の記述を参考にして、この構図を創案したという。この作品は1819年に「サビーヌ」と共に政府買上げとなり、価格は10万フランだった。この作品がダヴィドがフランスで制作した最後の作品となった。

レオニダスはスパルタ王でクレオメネス一世の異母弟。兄の娘ゴルゴを妻とし兄王の後をついで即位（前487年頃）、テルモピライの隘路で4,000のペロポネソス兵やその他の兵と共にペルシャ軍を阻止（480）、2日間固守するが、敵方への内通者がでて守備隊は敗走する。しかしレオニダスは300名のスパルタ兵と踏み止まって防戦し、遂に全員が戦死した。しかしペルシャ軍も大損害をうけ、この間ギリシャ艦隊は退避できた。古来武人の鑑として多くの詩人により歌われ、劇の主人公になっている。

18) *Ramsès II*, 正しくは *R-msiw* : 第19王朝の王（即位前1301-1234）。仇敵アッ

シリアのヒッタイト国を破り、つぎに和睦し、その王女を後宮に迎え、エジプトの最盛期を実現した。ヒッタイト国との決戦であるカデシュの戦いの模様をカルナク大神殿に彫刻し、世界最古の詳細な戦闘記録とした。アブ・シンベル神殿も彼の命令によって創設され、エジプト史上最も多い大建築群を残した。

19) Canope, Kanôbos : ナイル川の支流の河口にあるアレキサンドリアの北東にあったエジプトの古代都市。セラピス神を祭る寺院は当時の重要な巡礼地であった。また遊蕩の歓楽都市としても有名で、ローマ人はアレキサンドリアから運河を利用しカノプスに通った。蓋が神様の頭をした瓶や壺がオシリス神として尊重された。考古学者たちが、古代エジプト人達がミイラを制作する時に取り出した内蔵を入れる壺だ、としたのは誤りである。

20) Jean Victor Schnetz (1787-1870) : ヴェルサイユ出身の画家。最初ダヴィドに学び、次にルニョール、グロ、ジェラルールらについた。彼は初期の新古典主義とロマン主義の両方から影響をうけた。第一のものからデッサンを、第二のものから色彩の、それぞれ重要性を学んだのである。1819年のサロンに出品した「良きサマリア人」*Bon Samaritain* と「エレサレムの廃墟に涙するジレミー」*Jérémie pleurant sur les ruines de Jerusalem* が、画壇へのデビューであった。幸いこれらの作品は大好評で、一等賞を受賞する。以後順調に成功し、1840年にはローマ校校長、1843年にレジオン・ドヌール勲章を得、1855年の万国博覧会では一等賞を獲得した。彼の人は無邪気さとやさしい皮肉が好ましく混合した寛大なものであった。しかしこのやさしさの故に、物事を徹底的に追究するという気迫に欠けていたため、彼が一流の画家になれなかったのかもしれない。

21) Amabel Louis Claude Pagnest (1790-1819) : パリに生まれ、パリに死んだ肖像画家。ルーヴル美術館に所蔵されている彼の「シュヴァリエ・ド・ナントウーユ・ラ・ソルヴィルの肖像」*Portrait du Chevalier de Nanteuil La Sorville* は、この夭折した天才の傑作で、肖像画としては、アングルの「ベルタン氏の肖像」*Portrait de M. Bertin* に匹敵するものである。彼の師であるダヴィドはパニェストの才能を見誤っていた。色彩の魅力を開拓させず、形のデッサンを師は弟子に求めたのである。これは弟子の天賦の才を殺す事であった。師の指示と自分の本性の要求の間で苦悩したパニェストは生れつき虚弱な身体を健康を害し、僅か29歳で死去してしまう。ルーヴルの彼の肖像画に接し、その時になって人々は、天才的肖像画家を失った事を知ったのである。



22) Louis XVIII (1755-1824) : ルイ 15 世の皇太子ルイ・スタニスラス・グザヴィエとマリ・ジョゼフ・ド・サクスの子で、ルイ 16 世の弟として、11 月 15 日にヴェルサイユで生れた。兄ルイ 16 世とその皇太子（本来ならルイ 17 世となる筈）の死により、フランス国王となり、ルイ 18 世と称した。彼が現実の国王となるのは、ナポレオン没落後の 1814 年 4 月 6 日以降である。彼はマリ・ジョゼフィーヌ・ルイーーズ・ド・サヴォワと 1771 年に結婚するが子供がなく、彼の死後、王位は弟のアルトワ伯シャルル・フィリップが継承、シャルル 10 世と称した。

彼はヴォルテールに心酔した自由思想家でエスプリに富み、堅苦しく真面目な兄ルイ 16 世とはいささか毛色が変わっていた。三部会における第三身分分会の定員増加にも賛成し、1789 年の大革命勃発に対しても距離をおいていた。大革命の進展にも他人事のように眺めていたが、革命が急速に激化するのに不安を感じ、国王一家がパリを脱出した同日（6 月 20 日）に、国王一家と別の道を辿って無事にベルギーに亡命した。コブレンツで王弟アルトワ伯シャルルと合流、亡命貴族や国内の王党派と協力し、王政復古に努力した。幾多の苦難の後、ナポレオンの没落と共に宿願の王政復古を実現、1814 年 4 月 6 日パリ元老院の帰国要請に応じ、18 年間に及んだ亡命生活に別れを告げ、カレーに上陸、5 月 3 日にパリに入城した。彼はその前日パリ郊外のサン・トゥアンで、基本的自由と議会制を維持する旨の新憲法にあたる『憲章』*la Charte constitutionnelle* を発布、国王独裁の復活の意志のない事を明示した。彼のこのような穏健さは平和が実現した象徴として、長い戦乱に明け暮れた不安な生活に疲れた市民たちに歓迎され、彼のパリ入城は歓呼の嵐に包まれた。百日天下の後の第二次王政復古の時も、彼の穏健中正を旨とする政治姿勢は変らなかつた。しかし後継者としていた甥のベリー公爵が熱狂的なナポレオン支持者に暗殺されてから（1820 年 2 月 14 日）、側近の王党派の意見に耳をかたむけるようになり、それまでの穏健派のドカーズ総理を解任、後任に過激王党派のヴィレールに組閣を命じるに至るのである。ルイ 18 世は徐々に反動化し、絶対王政の復活を夢想するようになったが、専制君主に変身する前に歿した（1824.9.16.）。

23) Antoine Jean, baron Gros (1771-1835) : フランスの歴史及び肖像画家。1785 年ダヴィドのアトリエに入門、師から愛される弟子となる。イタリアに留学（1793）、ジョゼフィーヌの紹介でナポレオンを知り、「アルコラ橋のナポレオン」*Bonaparte au pont d'Arcole*（1798）を描いて、皇帝の愛顧を受けるようになる。パリに帰国後（1801）、多くの戦争画を制作、英雄的ナポレオンを描いて（「アイラウの戦場」*Le Champ de*

*bataille d'Eylau*, 1808 など) ナポレオン神話の醸成に貢献した。王政復古後も多くの弟子を育成したが、勃興してきたロマン派から、時代遅れの古典派の巨魁、として痛烈に批判攻撃され、傷心の余り、セーヌ川に投身自殺してしまった(1835.6.26.)。

24) Jeanne-Françoise-Julie Adélaïde Bernard, dame Récamier (1777-1849)：リヨンの銀行家の娘で、16歳で42歳の銀行家ジャック・レカミエと結婚した(1793)。才智と美貌で多くの賛美者を魅了し、彼女のサロンには統領政府時代に有名人が蝟集した。スタール夫人と親交を重ねたため、帝政時代になるとナポレオンにより国外追放処分を受けた。プロシヤのアウグスト親王から求婚されている。帝政崩壊後に帰国、再び社交界の花形として復活、以前と同じく多くの賛美者に取り囲まれたが、その中にはワテールローの勝者ウエリントン将軍、バンジャマン・コンスタン、シャトーブリアンがいる。特にシャトーブリアンは彼女の最も熱烈な賛美者で、彼女も彼の愛に答えたという。

25) Etienne-Jean Delécluze (1781-1863)：パリ生れの画家、文学者、批評家。父は有能な建築家で科学を愛好していたが、文学、特に詩を軽蔑していた。大革命の惨劇を避け、一家は郊外のムードンに移転したため、ドレクリューズは正規の学校教育が受けられなかった。しかし幸運にもバント神父という聖職者が家庭教師となり、有能な教師と熱心な生徒の間で、学業は著しくはかどった。彼は画家を志望し、ダヴィドの門下生となり、1808年の万博で「アンドロマク」*Andromaque*により一等賞を得た。この成功にも不拘、彼はダヴィドの時代は終り、改革が必要だと感じ、文学に転向。シャルル・ロワゾンの「リセ・フランセ」*Lycée français*に寄稿、その評論は高い評価を得た。やがて「モニトゥール」*Moniteur*の経営者ソーヴォオからも寄稿の要請があり、更にベルタン兄弟の「デバ」紙からも原稿の依頼があった。こうして彼は王政復古期の若い文学者たち、ティエール、ヴィルマン、クーザン、レミュザ、メリメらを知る事となる。その後も彼は『ダヴィド、その流派と時代：回想の60年』*David, son école et son temps, Souvenirs de soixante années* (1862)をはじめ、小説、伝記、旅行記など多くの作品を執筆している。美術評論家としてまた作家として当時は重視された人物であった。彼のサロンは当時パリの文学サロンの代表だった。

26) Georges Jacob (1739-1814)：フランスの家具製造業者。ルイ15世時代から始まったロカイユ様式の継承者で、ルイ16世時代、総裁政府時代を通じて最も優秀な家具職人だった。簡素な直線の金銀細工を使った重厚なマホガニー製の家具は、ブロンズや多色の嵌込みで装飾されていた。1796年に彼は息子のGeorges (1768-1803)とFran-

cois Honoré (1770-1841) に家督を譲った。息子たちは Jacob-Desmalter 工房を創立 (1803)、ペルシエとフォンテーヌのデザインする家具を製作、帝政時代の代表的家具製造業者になった。王政復古になってからはルイ 18 世の依頼で、後継者のベリー公のためにエリゼ宮の家具類を製造している。

27) *Ossian* : 紀元 3 世紀に活躍したとされる伝説的なケルトの吟遊詩人。彼の作品が知られるようになったのは、スコットランド生れの James Macpherson (1736-1796) が、オシアン原作を英訳したとして出版した『オシアン詩集』(全 2 巻, 1766 年刊) からである。この詩集は、当時流行していた古代趣味に合致して各国語に翻訳されて大いに愛読された。ナポレオンも愛読者の一人であった。しかしこれはマクファースンの創作だとする説も有力で、真偽論争は未だ明確な決着はついていない。

28) Lykourgos (前 390 頃-24) : アテナイの雄弁家で貴族の出身。デモステネスと共にアテナイにおける反マケドニア派の指導者の一人。アテナイ市の財政を 12 年間にわたって (前 338-26) 完璧に管理した。哲学をプラトンに、修辞学をソクラテスに学んだ彼は、アテナイの光輝ある独立を保持しようとして、愛国心の鼓吹のため、詩人たちの像を市中に建立した。彼の雄弁は、批評家によれば、技巧的かつ粗野であったとされるが、彼は気性の烈しい行動家であったらしい。彼の死後、彼の敵たちは、リュクルゴスの財政運営はアテナイに損害を与えたとして、彼の息子たちに損害賠償を要求、息子たちが払えないと知ると、彼らを投獄したという。彼の弁論は「レオクラテス駁論」*Anti Leokrates* のみが残されている。

29) セーヴル焼き : セーヴルはパリ南西のナンテール郡オート・セヌにある町で、現在の人口は約 2 万人。ヴァンセンヌにあった陶磁器製造所 (1740 年創設) が、この地に移転したのは、ルイ 15 世の愛人で美術工芸のパトロンであったボンパドゥール夫人の発案である (1756)。中国や日本など東洋で製作される磁器を西洋でも製造しようと、当時のヨーロッパ各国は研究に没頭していたが、18 世紀はじめドイツのザクセン地方で基本素材カリオンが発見されてから製造に成功、この秘法はマイセンで厳重に管理され門外不出だった。フランスではリムーザン附近のサン・ティリエでカリオンが発見され、磁器製作が可能になった。美術工芸を愛し保護奨励していたボンパドゥール夫人は積極的に援助して工房を新設、フランスでも本格的生産体制を確立した。工房は 1759 年に王立工場に認可され、製品にはすべて金を使用する特権が与えられた。

30) Antoine Watteau (1684-1721) : フランスの画家、版画家。フランドルのヴァラ

ンシエンヌの出身。1702年パリに上京、クロード・ジロー（1673-1722）やクロード・オードラン（1658-1734）らのアトリエで学ぶ。リュクサンブール宮の装飾係で管理官でもあったオードランのお蔭で、宮殿所蔵のルーベンスの傑作を見ることができたといわれる。1709年のコンクールでローマ賞を逃し、失意のうちに一時帰郷するが間もなく上京、裕福な蒐集家ピエール・クロザ（1661-1740）の後援を得て、上流社会に紹介された。彼はクロザの蒐集作品を模写、ルーベンスやヴェロネーゼ、ジョルジョーネの画風を体得した。ワトーは特権階級の豪華な夜会や園遊会に出席、それらを題材として上流社会の優雅な生活を描いて、一躍、流行画家となった。結核治療のためロンドンに渡るが（1719）、帰国後は自分の寿命の短さを予感した如く創作に精進、3年後の1721年7月18日、僅か35歳で歿した。彼は当時の宮廷風俗、田園風景を情熱的なタッチと高雅な調和を完璧なバランスを保って描き、18世紀最大の人気画家となった。代表作は「キテラへの上陸」「ジル」（ルーヴル美術館蔵）。

31) Jean Baptiste Joseph Pater (1695-1736)：ヴァランシエンス出身の画家、デッサン家。父は彫刻家だった。1713年に上京し、ワトーに学ぶ。ワトー、ランクレと共にロココ時代の代表的芸術家である。師のワトーにならい、上流社会の優雅な生活や牧歌的田園風景を描いたが、人物の描写力などはワトーに及ばなかった。また水浴する女性を描いた風俗画は、その艶麗さで特に人気があった。代表作は「田舎の祭り」「役者たちの到着」。

32) Nicolas Lancret (1690-1745)：パリ生れの画家、版画家。ジローの画塾でワトーを知る。ワトーの優雅な画風を継承し、ブルボン王朝末期の宮廷画家として、園遊会、舞踏会、夜会の情景を全体的に青みがかった画面に軽快なタッチで描いた。色彩はワトーよりも明るかった。彼はまた女優たちの肖像画や放蕩者たちの風俗画も描き、その他に優雅で生命力溢れるデッサンを多くの石版画として残している。

33) Jean Honoré Fragonard (1732-1806)：フランスの画家、版画家。シャルダン（1699-1779）やブーシェ（1703-1770）に学び、1752年にローマ賞を得てイタリアに留学、パロッチョ（1526-1621）、ソリメーナ（1657-1747）、ティボロ（1696-1770）らのバロック画風を学んだ。帰国当初は真面目な歴史画を描いていたが、上流社会の貴族や貴夫人と交際してから、艶麗な風俗画や人物画を創作し大成功をおさめた。特にルイ15世の愛妾デュ・バリ夫人のために製作し巨富を手中におさめ華かな生活を送っていたが、大革命によりすべてを失い、晩年は悲惨な日々を過した。彼はワトーやシャル

ダンと共にロココ時代の代表的画家で、ルイ 15 世の宮廷風俗を軽快なタッチと甘美な色彩で描いている。代表作は「愛の泉」「若い母親」など。

34) 自由の木：フランス大革命の初期、市町村の広場に植樹し、その木が新制度と共に成長するのを見守ろうとする風習が生じた。中部フランスのヴィエンヌ県のある司祭により、1790年に植樹されたのが最初、といわれるが、1793年頃には既にフランス全土で6万本が植樹されたという。以後、1830年の7月革命、1848年の2月革命の時も、自由の樹が植樹されたが、2月革命の際の自由の木は、1850年から52年にかけてほとんど切り倒されてしまった。

35) Janus, Janus：ローマの扉の守護神。すべての事物の始りを司る。一月のラテン名ヤヌアリウス Januarius は彼の名に由来する。その神殿には、東と西の側面にそれぞれ門があり、その扉は戦時には開かれ、平時には閉されていた。

36) Jean Antoine Houdon (1741-1828)：フランスの彫刻家。ルメールとピガルに学びローマ賞を得てイタリアに留学（1764-68）、ギリシャ・ローマ及びルネサンス期の作品の影響を受けた。1767年の「皮を剥いた人体」*Ecorché* は、人体の肉體構造について注目すべき研究だった。帰国後は「ダイアナ」*Diane* (1780), 「冬」*L'Hiver* (1783), 「夏」*L'Été* (1785) などを制作し、センスの良さと優美な手法を印象づけた。美術学校教授となり（1778）、学生を指導しながら創作にはげみ、モリエール、デイドロ、ルソーらの肖像を制作したが、代表作はフランス座に安置されているヴォルテール像（1778）といわれる。またフランクリンに同行、フィラデルフィアに行き、ワシントン像（1785）、フランクリン像（1778）を制作した。写實的リアリズムと端正な古典主義を融合した彼は、18世紀最大の彫刻家の一人に数えられる。

37) Georges Couthon (1756-1794)：クレルモン・フェラン出身で同地で弁護士を開業、大革命勃発と共に同市の裁判長になった（1790）。立法議会議員（1791）となるや、ジャコバン派のスポークスマンに就任した。病気のため両足が麻痺し人手を借りなくては発院できなくなったが、これがまた彼の人気を高めた。ロベスピエールやサン・ジュストの親友となり、国民公會議員に選ばれ（1792）、モンタニャール派の過激分子としてルイ 16 世処刑に賛成票を投じ、更にジロンド派の追放に貢献した（1793.6.）。公安委員会に入り（1793.7.10.）、リヨンの反革命暴動鎮圧部隊の派遣委員として、大量徴兵を断行、仮借ない弾圧により暴徒を討伐、リヨン市を占領した。国民公會議長に選出され（1793.12.21.）、革命裁判所に告発された被告の権利をすべて否定する悪法

「牧月 22 日法」を成立させた (1794.6.10.)。この法律で、被告は予審も受けられず、弁護士も備うこともできず、判決は死刑のみというものであった。エベール派を一掃し、この悪法で恐怖政治の強化を計った彼も、ロベスピエールの失脚と同時に逮捕され、彼と共に断頭台の露と消えたのである (1747.7.28.)。

38) Louis Antoine Léon de Saint-Juste (1767-1794) : 騎兵士官の父を持つが、家は法曹家の家系だったらしい。ソワッソンのオラトワール会の学校で学んだ後、一時法律事務所の書記をしていたが、退職してランス大学に入学した。若い頃は素行が悪く、母の貴重品を盗んで放蕩したため、数か月精神病院に監禁された事もあった。詩作に耽ったが、大革命勃発と共に政治に参加、故郷の村プレランクール村会の秘書、ついで国民衛兵部隊中佐となり、1790年7月14日パリの連盟祭に参加した。この頃からロベスピエールに心酔しジャコバン派に加入、国民議会に選出 (1791.9.) されたが、年齢不足のため議員になれなかった。しかし『革命とフランス憲法の精神』*Esprit de la révolution et de la constitution de la France* を出版し (1791)、成功して注目を浴びた。1792年9月、国民公会議員に選出されるや、ルイ 16 世処刑賛成演説 (1792.11.13.) などの雄弁で一躍人気者になった。女に見紛う清純な美青年だったが、傲慢で残酷、ロベスピエールらと共に恐怖政治を確立、ジロンド派、エベール派、ダントン派を反革命分子として肅正した。また対外戦争の徹底抗戦派で、自ら政府派遣委員としてライン軍や北部軍を督戦し、衣服や食糧の補給線を確立、士気を鼓舞し軍紀を厳正にした。国民公会議長になるや (1794)、彼は革命政府の財政的基盤を確固にせんと努力、貧農救済のため反革命分子の土地や財産を没収、これを彼らに分配した。彼は最後までロベスピエールに忠誠を尽し、ロベスピエールと共に処刑された (1794.7.25.)。

39) Marie-Joseph Chalier (1747-1793) : ピエモンテのボーラル出身の政治家。最初リヨンで貿易商を営んでいたが、大革命勃発と共に、マラーにならいいリヨンにおけるモンタニャール派の指導者としてジャコバン・クラブを創設、ついで革命裁判所を設置した。しかし 1793年7月17日に蜂起した連盟兵とジロンド派や王党派の暴動により失脚、逮捕された後に処刑された (1793.7.17.)。マラー、ル・ペルティエ・サン・ファルジョと同じく、彼も「自由の殉教者」とみなされるようになった。

40) J.-Fr. Gautier de Biauzat (?-1815) : 政治家にして司法官。クレルモン・フェランで弁護士をしている時に三部会議員となり、国民議会では左派に属し、活発に活動し、あらゆる改革を推進した。バプーフ裁判の時に陪審員の一人になった。パリから五

百人会議員に選出されたが、総裁政府はこの当選を無効とした。帝政以降、彼はパリ破壊院の顧問官を務めた。

41) Jean-Jacques Caffieri (1725-1792) : パリ生れの彫刻家。ナポリ出身の彫刻家や高級家具職人の家系出身で、最初は父に、ついでルモワース (1704-1778) に学ぶ。ローマ留学中にル・ベルナン (1598-1680) に魅了され、バロックの伝統を忠実に守った。胸像制作にすぐれ、正確さと迫実的表現を作品に与えた。代表作は「コルネイユ」像 (1777)。

42) Alexandre Roslin (1718-1793) : スエーデン出身で後にパリに定住した画家。バイロイト、バルマの宮廷画家を務めた後にパリに定住 (1752年から)。肖像画家として名声を博し、ロシュフーコー公の家族の肖像、プーシェ、マリニ侯の肖像を描いた。色彩豊かに優雅なニュアンスをかもし出す彼の女性像は特に人気があり、感傷的で甘美な雰囲気彼の画はグルーズに比較しえた。1753年に美術アカデミー会員。代表作は妻をモデルにした「扇をかざす女性」*La Femme à l'évantai* (1768)。

43) Louis Tocqué (1696-1792) : パリ生れの画家。ナティエ (1685-1766) に学び、後にその娘と結婚して息子になった。師匠と同じく肖像画を制作し、神話的で豪華な肖像画の技法は、師匠直伝のものであった。しかし師匠にはない自然への趣好、正確な観察と洗練されたニュアンスを描き技法も持っていた。代表作は「デンマーク王フレデリック 5 世」*Frédéric V de Danemark*。

44) Hubert Robert (1733-1808) : パリ生れの画家、版画家、デッサン家。最初スロズ (1705-1764) に学び、若きショワズール公に同行しローマに行く。そこで廃墟を描いたバンニーニ (1691-1765) の作品と古代趣味に深く感動し、大きな影響を受けた。帰国後、フラゴナールとサン・ノン神父と共に、1756年にイタリアを旅行、ローマ時代の記念建造物や美しい風景のデッサンを多く描いた。帰国後、プロヴァンス地方の廃墟やパリの変貌を描いて名声を得、「廃墟のロベール」Robert des Ruinesと呼ばれた。代表作は「ガール橋」*Le Pont du Gard*。

45) Jean-Baptiste Lemoyne (1704-1778) : パリ生れの彫刻家。父ジャン・ルイ・ルモワース (1665-1755) に学び、1738年にアカデミー会員となる。ルイ 14 世の彫刻に励み、数点の胸像がある。彼は東の間の表情を確定し、モデルの動きを素材に刻み込む技術を持っていた。代表作は「モンテスキュー」*Montesquieu* (1760)。

46) Le comte Charles-Claude La Billarderie d'Angivillier (?-1810) : ルイ 16 世の建

物及び庭園総監。科学、絵画、彫刻アカデミー会員。彼は美術家、学者、文学者たちの最も理解ある保護者の一人であった。ルイ 16 世に対する彼の影響力は絶大だった。1791 年、財産を没収されたため亡命し、ロシアで暫く過した後、ドイツで死去した。

47) François Desportes (1661-1743) : オート・マルヌ県シャンピニユール出身の画家でデッサンもパステル画も制作した。オードラン (1657-1734) と共にアネ城やヴェルサイユ宮の装飾に仿いた。1695 年にはポーランド王の宮廷画家を務めた。動物画に秀いで、ルイ 14 世の狩猟画を描くよう命じられた。彼は静物画も風景画も描き、人気を博した。代表作は「森の鹿」*Le Cerf aux bois*。

48) Christophe Gabriel Allegrain (1710-1795) : パリ生れの立像作家。代表作は「ナルシス」*Narcisse*, 「ダイアナ」*Diane*, 「入浴するヴィーナス」*Venus entrant au bain*。ルーヴル美術館に展示されている。

49) Etienne Fessard (1714-1774) : パリ生れの彫版家。アカデミー会員。正確な彫りだったが、無味乾燥な線は優美さに乏しかった。代表作はルーベンスの画を彫った「フランドルの祭り」*la Fête flamande*。

50) Gabriel Briard (1725-1777) : パリ生れの画家。ローマ大賞を受賞、1768 年にアカデミー会員。デッサンは純粹で爽やかだったが、色彩が冷くしばしば対象のものではなかった。代表作はヴェルサイユの天井画「オリンポスの神々」*l'Olympe assemblé*。

51) Claude Drevet (1710-1782) : リヨン生れの彫版家。有名な彫版画ピエール・ルイ・ドルヴェ (1697-1739) の従弟。彫りの繊細さで有名。代表作は「オーベルニュ枢機卿」*Cardinal d'Auvergne*。

52) Jean Georges Wille (1717-1807) : ドイツのケーニスベルグに生れ、パリで歿した彫版家。幼児から才能をみせ、貴族に働われ、銀器などの線彫りをした。2 年後の 1734 年パリに上京、肖像版画の小品のシリーズで名声を得、1761 年にはパリ美術アカデミーの会員に選ばれた。正確でデリケートで輝かしいタッチの彼の作品はヨーロッパ全土で愛好された。代表作は「フレデリック大王」*Grand Frédéric* の肖像。

53) Jacques Philippe Lebas (1707-1783) : パリ生れの彫版家。はやくから名声を得て、国王お抱えの彫版家となる。オランダとフランドルを長期間旅行し、多くの絵画から靈感を得た。同時にコワベル、ワトーらフランスの作家たちからも影響を受けた。500 点余の作品を残したが、代表作は「幸運な狩人」*l'Heureux chasseur* など。

54) Robert Daudet (1737-1824) : リヨン生れの彫版家。当時の最も活動的な芸術家



の一人で、大規模なシリーズのために創作した。その代表は「シヨワズール公のギャラリー」*Galerie de duc Choiseul* (1771) である。また多くの画家の作品を版画にしているが、代表作は、ジョゼフ・ヴェルネの画を彫った「水夫たち」*les Marines* である。

55) Pontchartrarn : アンリ 4 世の忠臣で、王が暗殺された後、皇太后マリ・ド・メデイシスを補佐したポール・フェリポー・ボンシャルトラン (1569-1621) が始祖の名家。ルイ・フェリポー・ボンシャルトラン伯 (1643-1727) はルイ 14 世に仕えた海相兼王室総監で、財政官僚としても傑出していたが、その子ジェロームは父の跡を継いだ、典型的な悪徳宮廷人で、その無能と毒舌と貧欲さで有名だった。本文中の女性が彼の妻かは不明だが、彼の位は伯爵なので、彼の息子の妻かもしれない。

56) Pierre Etienne Moitte (1722-1780) : パリ生れの彫版家。1771 年にアカデミー会員、1780 年に国王お抱えの彫版家となる。当時の画家グルーズ、ブーシェらの作品を版画にして人気を得た。代表作は「レストウ」*Restout* の肖像。

57) Jean Louis François Lagrenée 通称 l'Ainé (1724-1805) : パリ生れの画家。ヴァン・ルーに学び、ローマ賞を受けイタリアに留学、帰国後発表した「デアネイラの誘拐」*Enlèvement de Déjanire* が評判を呼び有名になった。しかしこの作品は彼の後の作品に比較すると二級品である。1755 年にアカデミー会員。ロシアの皇后から招かれサン・ペテルブルグに行ったが、その地の苛酷な気候に耐きれず、1781 年に帰国した。彼の愛好者だったルイ 16 世によりローマ校校長に任命され、この都に滞在中に、代表作「インディアン未亡人」*Veuve d'un Indian* を描いた。帰国後は国王から年金とルーヴル宮の豪華な部屋が与えられた。大革命によりルーヴル宮から退去しなければならなかったが、美術学校教授の職はそのままだった。帝政時代には、レジオン・ドヌール勲章を授与され、美術館長に任命されたが、老齢のため長くその職にとどまらなかった。

58) Joseph Marie Vien (1716-1809) : モンベリエ生れの画家、版画家。ナトワール (1700-1777) に学び、ローマ賞を得 (1742)、イタリアに留学しローマに滞在 (1745-50)、帰国後は版画愛好家のケリュス伯 (1692-1765) の保護を受け、新古典派の指導者になった。靈感も題材も古代から得たが、当代の趣好である性的優雅を失うことはなかった。ダヴィドは彼の弟子である。代表作は「デダルスとイカルス」(1754)、ルーヴル美術館所蔵。

59) Charles Andre Van Loo, 通称 Carle (1705-1765) : 画家一家の中で最も傑出していた。兄ジャン・バティストと共にフォンテーヌブロー宮のために働いた。ローマ賞

を受け (1723)、イタリアに赴き、サヴォワ公の宮殿にも仕えた。1734年に帰国、1762年はルイ 15 世の宮廷画家に任命された。名声は高く、一時はプーシェと並んでフラン派の首領と目された。歴史や聖書や神話に題材を採った伝統的テーマを扱った。ルーベンスやヴァン・ダイクを模倣したが、輝しさが欠落していた。代表作は「聖母の婚姻」「マリ・レスチンスカの肖像」(ルーヴル美術館)。

60) Claude Joseph Vernet (1714-1789)：アヴィニョン生れのフランスの画家、版画家、デッサン家。イタリアに赴き (1734-53)、プーサン (1593-1665) の風景画を敬愛し、彼はローマやナポリまたその近郊の風景を描いた。また点景として日常の作業をしている人物を配した。繊細なタッチで、透明な雰囲気、地中海の独特の光を描き、コローの先輩となっている。帰国後はマリニー侯の依頼で、フランスの港湾風景のシリーズを描いた。海の風景、月光嵐、難船などのテーマの作品は好評を博した。代表作は「難船」(ルーヴル美術館)。

61) Jean Michel Moreau, 通称 Moreau le Jeune (1741-1814)：フランスのデッサン画家、版画家。兄ガブリエル (1740-1806) を Moreau l'Aîné といった。ラボルドの『シャンソン』の版画で有名になり、宮廷付きのデッサン画家に任命され、「ルイ 16 世の結婚」*le mariage de Louis XVI* を創作した。その他、ルソー、モリエール、ヴォルテールの作品の挿絵を描いた。優雅で正確で柔軟なタッチで、2,000 以上の版画を創作した。

62) Jean Baptiste Greuze (1725-1805)：画家志望を家族に反対されたため、一人で努力しなければならなかった。1775年のサロンに出品した処女作は成功をおさめた。当時のナイーブな感傷に適合していたからである。イタリア滞在から帰国してデイドロと知り合い、この文豪から感傷主義を激励されている。パリ市民は、彼が描く道徳情操豊かな甘美で感傷的作品を激賞した。彼はまた優秀な肖像画家であった。代表作は「こわれた甕」*Cruch cassée* (ルーヴル美術館)。

63) Jean Baptiste Regnault (1754-1829)：パリ生れの画家。ヴィヤンに学び、1776年のローマ賞を受けた。1783年にアカデミー会員、美術学校の教授として教鞭を執るかたわら、ラファエロの賛美者として画業に励んだ。ダヴィドの非妥協性と冷さを批判し、自らダヴィドのライヴァルと称した。古代に靈感を得て創作したが、しばしば表現力が不足していた。代表作は「クレオパトラの死」(デュセルドルフの国民博物館)。

64) Louis Philippe Mouchy (1734-1801)：パリ生れの彫刻家。ピガル (1714-1785) に学び、暫くイタリアに滞在、1768年にアカデミー会員になった。美術学校教授とし

で弟子を育成した（1776から）。代表作は「若き羊飼ひ」。

65) Aujustin Pajou (1730-1809) : フランスの彫刻家。ルモワース (1704-78) に学び、ローマ賞を得て (1784)、1752年から56年までローマに滞在。帰国後は同門のカフィエリ (1725-1792) の好敵手となった。デュ・バリ夫人の肖像を制作、またヴェルサイユ宮の歌劇場の装飾を手がけ、その確かな技術と創意に富む幻想力を示した。ルイ16世の依頼で、デカルト、パスカル、ボシュエら偉人の立像も制作している。「棄てられたプシュケ」*Psyché abandonnée* (1785-1791) は柔媚なモデルの優美な姿態で彼の代表作。

66) Clodion, 本名 Claude Michel (1738-1814) : ナンシー生れの彫刻家。1755年に上京。叔父のラベール・シジスベール・アダムとピガルに学ぶ。1759年にローマ賞を得て、1762年から71年までローマに留学。帰国後は主としてパリで活躍した。ギリシャ・ローマ神話に題材をとった愛らしいロココ風の作品を多く制作した。代表作は「ニンフとサチュロス」(メトロポリタン美術館)。

67) Antoine Laurent Thomas Vaudoyer (1756-1846) : 龍騎兵としての軍隊生活の後、建築を志し、アントワヌ・ペイルに師事、1783年にローマ賞を得てローマに留学、その間にベルシエ、フォンテヌらと親交を結ぶ。1787年に帰国、執政政府時代 (1799-1804)、カトル・ナシオン校の学士院に居住を命ぜられた。1823年、師の跡を継いでアカデミー入りを果す。マルセイユのカテドラルを設計、建立にかかったが、完成をみずに死去、弟子たちの手で落成した (1893)。

68) Philibert Louis Debucourt (1755-1832) : パリ生れの画家、版画家。ヴィヤン (1716-1809) に学び、美しい画面で有名になり、多くの絵画蒐集家の垂涎の的になっている。「狩からの帰還」*Retour de la chasse* などが代表作。1782年にアカデミー会員、国王お抱えとなる。1785年頃、英国人によって紹介された版画に魅了され制作に没頭し、完全な再現に成功した。代表作は「村の結婚式」*Noce de Village*。また彼は蝕刻凹版の一種アクアチントにも手を染めて成功している。代表作は「聖具室の内部」*Intérieur dim sacristie*。国立図書館がこれらの代表作を収蔵している。

69) Charles Bossut (1730-1814) : フランスの数学者。数学、工学、流体力学の概論書を多く書いた。「百科辞典」の数学の項目の執筆にあたり、ダランベールに協力した。1777年にアカデミー会員となる。

70) comte d'Artois : ここでは後のシャルル10世 (1757-即位1824-1830) を指す。

71) ジロンド派のリーダーで、政争に破れ自殺したロラン・ド・ラ・ブラティエール (1734-1793) を指すものとみられる。

72) Hôtel de Mayenne は第4区のサン・タントワヌ街21番地にあり、セヌ街というのは、著者の勘違いではなかろうか。この土地には hôtel de Petit-Musc が立っていて、1378年にシャルル6世が買収して、弟のルイ・ドルレアンに与えたのが最初。時代と共に名称が変わり、1613年にマイエヌ公の子アンリ・ド・ロレーヌがこの土地に豪邸を建築、以後この邸がマイエヌ館と呼ばれるようになった。1759年に請願書審査官オルメソンが取得してから、オルメソン館とも呼ばれるようになった。

73) Jacques Pierre Brissot (1754-1793) : シャルトル生れのフランスの政治家、ジャーナリスト。イギリス、オランダ、アメリカを旅行、黒人問題に関心を持つ。帰国後、「フランスの革命派」*Patriote française* を創刊、ジャコバン派に属し、ヴァレンヌ事件 (1791) 後は、ブルジョワ共和主義の立場にたった。立法議会議員 (1791) としてジロンド派を代表し、オーストリーへの開戦を主張した (1792)。国民公会議員に選出され、ロベスピエールと烈しく対立、政争に破れ逃亡中にムーランで逮捕され、革命裁判所により反革命分子として死刑の判決を下され、パリでギロチンにより処刑された (1793.10.31.)。

74) rue des Orties : 正確には、rue des Orties-du-Louvre。現在の第1区のカルーゼル広場の建設のために取り払われた幾つかの通りの一つで、現在は無い。

75) Madame Roland, 旧姓 Philipon Jeanne Manon Roland de La Platière (1754-1793) : 注71) の妻。パリの木版師の娘で、才媛の誉たかく、ロランと結婚し、パリでジロンド派の中心として活躍したが、ジロンド派の敗北と共に処刑された (1793.11.8.)。『回想録』*Mémoires* を残した (1820)。逃亡中のロランは妻の処刑を知り、絶望のあまり自殺。

76) Charles Gounod (1818-1893) : パリ生れの音楽家。パリ音楽院に学び、ローマ賞を得て (1839)、イタリア留学。ドイツ、オーストリーを巡遊後に帰国、教会のオルガン奏奏者を務めながら作曲をした。最初は教会音楽を志したが、シューマン、ベルリオーズに感銘を受け、世俗の音楽に転向、オペラやオペラ・コミックを作曲した。「いやいやながら医者になれ」*Le Médecin malgré lui* (1858)、「サフォー」*Sapho* (1851) は大した評判にならなかったが、「ファウスト」*Faust* (1859) で一躍名声を得た。甘美な「ロメオとジュリエット」*Roméo et Juliette* で巨匠と遇されたが、最後のオペラの失敗

から（1881）、以後は宗教音楽の作曲に専念した。（「リクイエム」*Requiem*（1893）など）。彼は19世紀フランス音楽の抒情伝統の核心を形成した。

77) パリ市民のヴェルサイユ宮乱入：凶作と社会不安が重なり、パリ市のパン屋の店頭でパンが出なくなった。この食糧危機を解決してくれるのは国王だ、と単純に信じ込まされたパリのおかみさん連中は、バスチーユ襲撃の英雄スタニスラフ・メヤールに先導され、ヴェルサイユに押し寄せた。彼女らは国王一家を、「パン屋、パン屋の女房、パン屋の小僧」と呼んだ。国民議会は当惑し、国王に善処を促したが、国王は小麦を支給しようという約束しかできなかった。雨に降られ一晩中待たされたパリの女たちは夜が明けるや、しびれを切らし柵を破って宮殿に乱入、阻止する衛兵たちを殺害、マリ・アントワネットは女たちから逃れるため、王の居室に逃げ込まねばならなかった。国王一家がバルコニーに姿を見せた時、暴徒たちは一斉に「パリへ！」と叫んだのである。国民衛兵司令官ラ・ファイエットは事態の重大さを国王に説明、パリ市民の要求をいれ、パリに行くことを了承させたのである。国王一家はパリ市民に囲まれて、強制的にパリに連行された（1789.10.6.）。

78) palais des Tuileries：セヌ川の側をテユイルリ河岸、反対側をリヴォリ通りに区切られている公園に名を残している。パリ・コミューヌの乱の時に焼失、再建されなかったが、一番端にある左右の翼棟のみが焼け残り、修復されて、セヌ川側はオランジュリ美術館、リヴォリ通り側はジュ・ド・ポーム美術館になっている。

カントリーヌ・ド・メディススが、陰気なルーヴル宮に嫌気がさし、快適な新宮を建設しようとしたのが、この宮殿の始まりである。ルーヴル宮のすぐ西隣りという場所柄もあり、当時はシャルル5世の城壁外にあったこの一帯は、2、3軒の樵の家があるルーヴレの森の外れで、地平線には、シャイヨーとパッシーの丘が見えた。建設予定地には羊の牧場と2軒の瓦（テユイル）工場があり、この工場は立ち退いてもらう事になる。

建築家フィリベール・ドロルム（彼の死後はジャン・ビュランが受け継ぐ）は、南北に伸びる平行した2棟の主屋を建築、より短い4棟の建物で主屋を繋ぎ、中央に大きな中庭、両脇にそれぞれ1つずつの小さな中庭を設置する、という計画だった。ルーヴル宮と新宮殿を繋ぐ大回廊グランド・ガラリーは、種々の事情で中断され、完成するのは、アンリ4世に命じられたジャック・アンドルーエ・デュ・セルソー2世により、1610年ようやく完成した。

しかしながら、迷信深かったイタリア女性のカトリーヌは、お気に入りの占星術者リュ

イジェリの忠告を信じ、せつかく完成したこの新宮殿には一度も住まなかったのである。宗教戦争の間は、約 20 年間放置されたままだった。マリ・ド・メディシスは、夫のアンリ 4 世の死後、リュクスンブル宮を造営してそちらに住み、テュイルリ宮はまたも主人不在の邸となってしまう。

ルイ 14 世は、この宮殿のアンバランスな部分を取り壊し、完全な修復と増改築を行う。建築家ル・ヴォーとその婿オルベにより、ビュラン棟と対をなす「劇場棟」pavillon du Théâtre、フロール棟と対をなすローマ神話の果樹の女神の名をとった「ポモナ棟」pavillon de Pomone が建設された。彼らは更にこの 2 つの新館を繋ぐ「機械の間」Salle des Machines を建築した。2 人はまたドロルムとビュランの主屋を増改築して 3 階にし、ルーヴル宮のシュリー棟の円天井に呼応する巨大な円天井を新設したのである。また翼棟も 1 階かさあげして、ゆるやかな傾斜をもつ屋根をつけた。長さ 240 米に達したテュイルリ宮は、この形のまま、パリ・コミューヌの乱まで 2 世紀を経るのである。

内装は時代と共に改装され、この宮殿の快適さは向上していく。そのため、1790 年にルイ 16 世とマリ・アントワネットとその子供たちが住んでから、ナポレオン 1 世とジョゼフィーヌ、2 番目の妻のマリア・ルイザ、ルイ 18 世、ルイ・フィリップ、ナポレオン 3 世とユージェニー皇后、と歴代のフランスの君主たちが居住するようになる。

1871 年 5 月 23 日、コミューヌ軍の略奪の後、火薬とタールと石油とテレピン油を満載した馬車がカルーゼル門を通過して中庭に進入、乗っていた兵士たちがそれらをたつぷりと宮殿中に撒き散し、火を放った。宮殿はたちまち煙と焔に包まれ、丸 3 日間燃え続け、もしヴェルサイユ政府の第 26 大隊が駆けつけ消火にあたらなかったら、ルーヴル宮も延焼したであろう、といわれる。真っ先に消火にあたったベルナルディ・ド・シゴワイエ中尉の名は、歴史の 1 頁に永遠に記される事になった。

79) André Marie, baron Hue (1786-1854) : 父フランソワ (1757-1819) はルイ 16 世の忠臣として有名で、ルイ 18 世の侍従長を務めた。アンドレ・マリも父の死後にその職を受け継ぎ、ルイ 18 世の亡命中その身辺にあって忠勤にはげんだ。ブルボン家の帰国と共にフランスに帰り (1814)、近衛騎兵旅団長、ついでフェルトル公の副官となった。1830 年の 7 月革命まで侍従長を務めた。

80) la porte de Saint-Germain : パリ第 6 区のエコル・ド・メディシーヌ街 (長さ 242 米、幅 5 米から 20 米) の 87 番地にあった、1430 年のフィリップ・オーギュストの城壁にあった城門。1598 年に修復されたが、他の城門と同じく 1672 年に取り壊された。

コルドリエ門とも呼ばれたのは、近くの15番地から21番地にかけてあったコルドリエ修道院に由来する。

81) Pierre Antoine de Machy (1722-1807)：パリ生れの画家、版画家。イタリア出身のセルヴァンドーニ (1695-1766) に学び、建築的眺望的作品を1757年から1802年にかけて多数創作した。1758年にアカデミー会員、遠近法の透視図の教授として美術学校で教えた。代表作は「廃墟の神殿」*Temple en ruine* でルーヴル美術館にある。

82) Horace Vernet (1789-1863)：Charles Horace Vernet (1758-1836) の息子。父と同じく画家、デッサン画家。熱烈なナポレオン崇拝者で、海と戦争の絵の第一人者だった。帝政時代の兵士のヒロイズムを、光輝あるタッチで描き、ボードレルは、彼は画筆で戦う戦士だ、と賞賛した。しかし帝政崩壊後はブルボン家に仕え、更にナポレオン3世のお抱え画家となった。戦争画の他に風俗画も描き、古典主義からロマン的写実主義への移行を示した。石版画、木版画も描いた。

83) Michel Duroc, duc de Frioul (1772-1813)：トゥーロン包囲戦の時 (1793)、ナポレオンを知り、以来親友となる。イタリア及びエジプト遠征に副官として同行した。霧月18日のクー・デタでナポレオンに協力した。スペインのカルロス4世の譲位問題などの微妙な外交交渉にも手腕を発揮した。1805年に元帥となり、オーステルリッツやワグラムの会戦で敢闘したが、バウゼンの戦いで戦死した (1813.5.22.)。ナポレオンは親友の死に涙したといわれる。



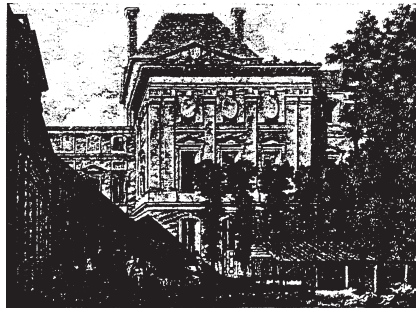
INTÉRIEUR DE L'ATELIER DE DAVID.  
Mathieu Cochereau, *pinxit.* Musée du Louvre.

[図版 A] ダヴィドのアトリエの内部



[図版 B]  
1815 年頃の  
ダヴィド

LE PEINTRE DAVID VERS 1815.

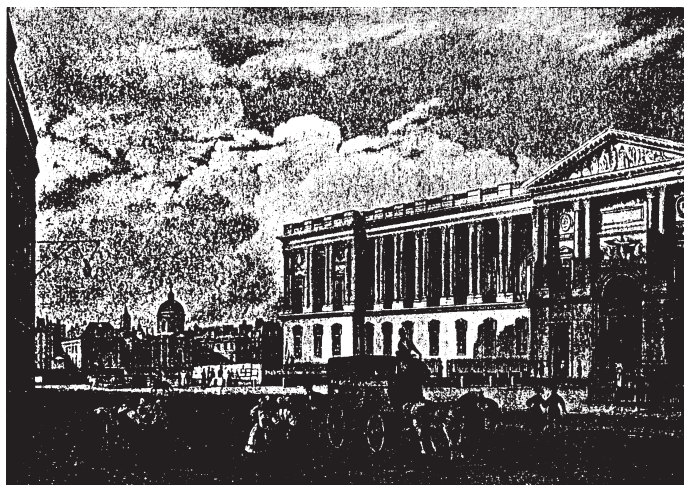


[図版 C]

VUE D'UN PAVILLON DU LOUVRE PRISE DU JARDIN DE L'INFANTE VERS 1830.

1830 年頃皇太子の中庭よりみたルーヴル宮





Schmidts, *del.*

L'E LOUVRE VERS 1830.

Sabattié, *sculp.*

[図版 D] 1830 年頃のルーヴル

(追 記)

- (1) 本稿は、Georges Cain 著 *Le long des Rues* (Flammarion 社, 1912 年刊) から、訳者の興味をそそった章を訳したものである。原題の意味は、「通りに沿って」、であるが、パリの歴史に言及している箇所が多いので、「パリ歴史散策」と意識してみた。テキストをよりよく鑑賞する一助として、人名、地名などの解説として、訳注を補足してある。お役に立てば幸甚である。
- (2) 翻訳にあたり、主として利用させていただいた文献のみ記し、謝意を表したい。
- イ) 「十九世紀ラルース大辞典」
  - ロ) 「岩波西洋人名辞典」
  - ハ) 「世界美術辞典」(新潮社, 昭和 60 年刊)
  - ニ) 「フランス文学辞典」(白水社, 1974 年刊)
  - ホ) 北島広敏著「パリの橋」(グラフ社, 昭和 59 年刊)
  - ヘ) J-P.Clébert : *Les Hautes lieux de la littérature française*, (Bordas 社, 1992 年刊)
  - ト) J.Hillariet : *Connaissance de vieux Paris*. (Princesse 社, 1954 年刊)
  - チ) J.Hillariet : *Dictionnaire historique des rues de Paris* (Minuit 社, 1985 年刊, 2 巻)
  - リ) Félix et Louis Lagare : *Dictionnaire administratif et historique des rues et monuments de Paris* (Maisonneuve et Larose 社, 1994 年新刊)
  - ヌ) 松村嘉津著「巴里文学散歩」(白水社, 1958 年刊, 2 巻)
  - ル) 宇田英男著「誰がパリをつくったか」(朝日新聞社, 1994 年刊)
  - オ) ミシュラン社編「パリ」(実業之日本社, 1991 年刊)
  - ウ) 河盛好蔵著「パリ物語」(角川書店, 昭和 34 年刊)
  - カ) 新倉俊一他共著「事典・現代のフランス」(大修館書店, 1977 年刊)